

## 現代朝鮮語の動詞の連体形「 $\text{ㄹ}$ 」について

中島 仁

### 1 はじめに

#### 1.1 研究の目的

本稿<sup>1</sup>の目的は、現代朝鮮語の連体形語尾<sup>2</sup>「 $\text{-ㄹ}$ 」が動詞についた形である「 $\text{ㄹ}$ 」<sup>3</sup>が、どのような意味機能を持つかを明らかにするところにある。あわせて、「 $\text{ㄹ}$ 」があらゆる意味と動詞のアスペクト的クラスとの関連性についても言及する。

#### 1.2 研究の対象と方法

現代朝鮮語の連体形語尾の体系については、その研究者の取る立場により大きく2つの体系が存在すると言える。連体形語尾としては「 $\text{-ㄹ}$ 、 $\text{-ㄹ}$ 」のみを認め、「 $\text{-ㄹ}$ 、 $\text{-ㄹ}$ 」の両形式については「 $\text{-ㄹ}$ 、 $\text{-ㄹ}$ 」にそれぞれ「 $\text{-ㄹ}$ 」がついてできる複合形式であると考え、終止形や接続形にあらわれる「 $\text{-ㄹ}$ 、 $\text{-ㄹ}$ 」との共通性を求めようとする立場と、「 $\text{-ㄹ}$ 、 $\text{-ㄹ}$ 、 $\text{-ㄹ}$ 、 $\text{-ㄹ}$ 」をそれぞれ独立した語尾であるとする立場の2つがそれである<sup>4</sup>。

本稿では後者の立場をとり、「 $\text{-ㄹ}$ 、 $\text{-ㄹ}$ 、 $\text{-ㄹ}$ 、 $\text{-ㄹ}$ 」をそれぞれ独立した語尾であるとする。通時的にはともかく、共時的観点からの研究をするにあたっては、連体形において終止形・接続形の「 $\text{-ㄹ}$ 、 $\text{-ㄹ}$ 」との共通性を求めるのは難しいと考えるためである<sup>5</sup>。

また、本稿では動詞につく「 $\text{-ㄹ}$ 」のみを研究の対象とし、形容詞・存在詞・指定詞につく「 $\text{-ㄹ}$ 」は研究の対象としない<sup>6</sup>。また、「 $\text{ㄹ}$ 」が否定形や不可能形をとっている場合<sup>7</sup>、冠形詞と考えられる「 $\text{ㄹ}$ 」（去る、この前の）、後置詞と考えられる「 $\text{-ㄹ}$ 」（...に対する、...についての）、「 $\text{ㄹ}$ 」（...のための）も、本稿では研究の対象としない。

本稿では、用例を実際の言語資料の中から1120例を収集し、その用例を用いて「 $\text{ㄹ}$ 」の持つ機能を分析した。分析に用いる資料としては1990年以降に韓国で発行された小説を選択した。

本稿で用いた資料の一覧は、本稿末尾に略号と共に示す。また、用例を引用する際は、用例の後ろに出

<sup>1</sup> 本稿は1998年10月28日の第148回朝鮮語研究会の発表要旨である中島仁(1998)を改稿したものである。

<sup>2</sup> 本稿で使用する連体形等の基本的な文法用語は菅野裕臣(1981)、菅野裕臣他編(1988)による。「連体形」という術語については、韓国では一般に「 $\text{ㄹ}$ 」（冠形形）、「 $\text{ㄹ}$ 」（冠形詞形）などと呼ぶことが多い。

<sup>3</sup> 本稿ではこれ以降、用言に「 $\text{-ㄹ}$ 」が結合した形を、朝鮮語の代表的な用言「 $\text{ㄹ}$ 」を用いて「 $\text{ㄹ}$ 」と表記することにする。ただし、語尾自体について言及するときにはそのまま「 $\text{-ㄹ}$ 」と表記する。他の文法形式の表記もこれに倣う。また、表記の都合上分かち書きはしないことにする。

<sup>4</sup> 前者の立場をとるものには李翊燮・任洪彬(1983)、金倉燮(1987)、徐正洙(1990)、徐正洙(1994)、崔東柱(1995)、後者の立場をとるものには(1937)、(1980)、李南淳(1981)、任洪彬(1982)、任洪彬(1993)、野間秀樹(1997)などがある。

<sup>5</sup> 連体形にあらわれる「 $\text{-ㄹ}$ 」と、終止形・接続形にあらわれる「 $\text{-ㄹ}$ 」を同質のものとする点については任洪彬(1993:305-318)に詳しい記述がある。野間秀樹(1997:102)にも同様の指摘がある。

<sup>6</sup> 存在詞と結合する「 $\text{-ㄹ}$ 」も同一の形態素であると思われるが、今回は考察するのに十分な用例が集まらなかったため、研究の対象としなかった。形容詞・指定詞と結合する「 $\text{-ㄹ}$ 」については、同一形態素であると言えないこともないが、形容詞・指定詞と動詞・存在詞とは連体形語尾の体系が「 $\text{-ㄹ}$ 」との結合の可否において異なるため、一旦区別して扱うのが適当であると考え本稿では研究の対象としなかった。

<sup>7</sup> 否定形とは「 $\text{ㄹ}$ 」、「 $\text{ㄹ}$ 」のような形を取っているもの、不可能形とは「 $\text{ㄹ}$ 」、「 $\text{ㄹ}$ 」のような形を取っているものを指す。

典を[略号:ページ]のように示す。

### 1.3 先行研究

先行研究における「-ㄴ」についての記述は、連体節やテンス等について論じる際に、他の連体形語尾と共に論じられており、「-ㄴ」のみを取り上げた論文はないと言える。また、先行諸研究は「-ㄴ」がテンスをあらわすのか、アスペクトをあらわすのか、またはその両者の機能をあわせもつのかというように大きく3つの立場に分けられる。

まず、「-ㄴ」がテンスをあらわすとしているものには、李翊燮・任洪彬(1983)、菅野裕臣(1986)、(1987)、任洪彬・張素媛(1995)があり、いずれも過去をあらわすということで見解が一致している。ただ菅野裕臣(1986)では、「-ㄴ」が過去だけでなく一部の動作では現在の状態をあらわすとしたり、過去の意味の場合にその一部が「          」または「          」と置き換えられると述べ、意味だけでなく置き換えの可能性にまで言及している点で他者と異なり注目に値する。

次に、「-ㄴ」がアスペクトをあらわすとしているものには南基心(1978)、梅田博之・村崎恭子(1982)、金倉瑠(1987)がある。南基心(1978)は「過去だと言う時、どの時点を基準とするかというのが不分明であり、またこれは言語外的な要件によって不規則に決定される」と述べ、「-ㄴ」はテンスを表現する以外のものであるとし、「完了の相をあらわすというのが最も妥当な解釈であろう」と結論づけている。また、金倉瑠(1987)では、「-ㄴ」が「記述者の側から状況内部に関心をよせず、状況全体を一つにあらわす」とし、これを完了相と呼ぶと同時に、「時制とは無関係な要素」と見ている。南基心(1978)perfect、金倉瑠(1987)は perfective をあらわしていると考えられるが、両者ともアスペクトに注目している点では脈を同じくするといえよう<sup>9</sup>。上の両者と似た立場のものとして梅田博之・村崎恭子(1982:49)では、「-ㄴ」が「用言の語幹の意味をそのまま示す連体形であるから、テンスの概念は入っておらず、後続する名詞を既定するだけの機能をもっている。従って、形容詞など状態を表す語幹につくとそのままの意味を表すが、動作を表す語幹につくと既定であるが故に動作が完了した意味を示す。」とし、「既定形語尾」と名付けている。

最後に「-ㄴ」がテンスとアスペクトの両者をあらわすという立場を取ったものがあり、南基心・高永根(1987)、Martin(1992)、徐正洙(1994)、崔東柱(1995)、野間秀樹(1997)などがある。南基心・高永根(1987)では「結果性がある」という条件付きではあるが「完了的用法を表示しとする」としている。崔東柱(1995)は[-状態<sup>10</sup>]の意味特性を持つ状況では、「-ㄴ」が「どの場合でも、特定時点以前のことを意味することだけは明らかである」とすると同時に「状況の内的時間構成をあらわさず、全体的に把握する完了相の機能を持つ」として、「過去」と「完了相」の両者の機能をあわせ持つという立場を取っている。また野間秀樹(1997)では、「          」自体がそもそも相当に「完了」や「結果」とでも言うべきアスペクト的性格が濃い」とすると共に、「動詞に付くと過去のことから、形容詞に付くと現在のことがら」をあらわすとし、動詞に付く場合と形容詞に付く場合を一括して考え、「既にそうってしまった」ということから「完成形」と名付けている。

## 2 定義

3章以降で            が実現し得る意味について述べていくが、それに先立ち関連する概念の主なものについて本稿での定義をまとめておく。

<sup>8</sup> 南基心(1978)では、「-ㄴ」が持つ機能は「現在完了とも言えるが、現在と限定するのは基準が不分明である」とし、「終わった行為の結果があらわれ、持続されていること」をあらわす完了の相をあらわすとしている。

<sup>9</sup> perfect をアスペクトと見るかどうかについては諸説があるが、本稿では一端アスペクトと考えることにする。

<sup>10</sup> 崔東柱(1995)では、「述語や命題の相的特性ではなく、状況の相的特性に関して注目することにする」とし、状況の相的特性を±であらわしている。[±状態]とは「状態」と「動作、事件」の区別をあらわしている。詳細は崔東柱(1995:26-27)参照。

## 2.1 テンス

連体節のテンスを考える際には基準時点をどのように決定するかが問題になると言える。先行研究ではテンスをあらわすという時、その基準時点が流動的な(一定でない)ことが問題にされている。南基心(1978)では、「過去だと言う時、どの時点を経験するかが不分明」であるとし、テンスとは無関係な要素であるとしている。また、逆に崔東柱(1995)では「基準時点が流動的である点」に問題があるとしているが、「特定時点以前のことを意味することだけは明らかである」と述べている。このように、先行研究でもしばしばその基準時点が、の實現するテンス的意味の記述において見解を分かち原因になっている。実際、の實現するテンス的意味の記述において、どの時点を経験するかは非常に重要なことであると言える。

テンスとは客観的なものであると捉えられているが、時間が言語によってあらわされている以上話し手の主観的な状況の把握の仕方が反映されていると考える方がより自然である<sup>11</sup>。現実にはその事柄が過去に起こったかどうかよりも、話し手がその事柄が過去に起こったことであると把握することの方が重要なのであって、言語であらわされる時間は、言語外の時間とはまったく異質のものであると言える。

つまり、言語の「送り手」としての話し手の位置「私 - ここ - 今」という話し手が主観的に自由に決定しうる時間的・空間的な領域というものが存在し、そこを経験して初めてが過去をあらわしているかどうかと言えるのではないだろうか<sup>12</sup>。その話し手が自由に決定しうる、対象指示の基準となる時間的・空間的な領域を、本稿では「発話の起点」と呼び、テンスを以下のように定義する。

「テンスとはある時点を経験して、ある事柄・動作・状態などがどのような時間的位置関係にあるかを示す指示的範疇であり、文法範疇である。そして、発話の起点以前を「過去」、発話の起点と同時にあるものを「現在」、発話の起点以後を「未来」と呼ぶことにする。また、「現在」というのは話し手が「今」としてあると認識するある程度の時間的な幅を持った時間を言う。」

ここで注意しておきたいのは、発話の起点である話し手が「私 - ここ - 今」としてある位置は、常に一定の場所に存在するわけではなく、話し手の意志によって自由に移動しうるということである。場合によって発話の時点と重なることもあれば、主節の時点と重なることもありうる<sup>13</sup>。そのため従来のテンス論にあるように、テンスを絶対テンス(absolute tense)と相対テンス(relative tense)とに分けることは必ずしも必要ではないと考える<sup>14</sup>。

以下本稿では、この定義に従い議論を進めていく<sup>15</sup>。

<sup>11</sup> 野間秀樹(1988:67)にも、「『過去』という概念は、現実の上で過去のことかどうかよりも、話し手や聞き手が過去のことと把握しているかどうかということに関する概念なのである。」という記述がある。

<sup>12</sup> 「言語の諸要素は人称、場所および時制に関して対象指示の起点 Origo である『私 - ここ - 今』を経験している。この起点は伝達過程の中で『送り手』としての話し手の位置によって決定される。」ヴァインリヒ(1985:35)。

<sup>13</sup> このような考え方は野間秀樹(1997:124-125)にも、「連体形の『時』は、時制的な観点からのみ見ると、主節の『時』を経験とするいわゆる相対時制でも、発話時を経験とする絶対時制でもなく、主節からも発話時からも独立した設定時を持つ時制だといえる。ここではそうした時制を独立時制(independent tense)と呼ぶことにする。独立時制は、主節の時や発話時から浮いている時制(floating tense)である。朝鮮語の連体節の時、条件によっては主節の『時』に呼応するように働き、あるいはまた発話時に呼応するように働くように見えるが、常に主節時と発話時どちらかの『時』に支配されているというわけではないという点で、基本的には独立していると見るべきであろう。連体節の『時』は、主節時や発話時からは浮いている『時』(floating tense)なのである。」とある。

<sup>14</sup> 絶対テンス(absolute tense)と相対テンス(relative tense)に分ける必要がある場合も存在しないとは考えないが、少なくとも連体節の時制を論じるにあたっては不可欠なものとは言い切れないと考える。本文中にも挙げたが、先行研究でものテンス的意味を考える際に、のあらわしている意味よりもその基準時点が問題視されている場合が存在している。

<sup>15</sup> テンスの定義については、南基心(1978;1985)、Comrie(1985)、国立国語研究所(1985)、伊藤英人(1989、1990)、崔東柱(1995)等

## 2.2 パーフェクト

本稿でのパーフェクトの定義は Comrie (1976:52) の以下の記述に従う。日本語訳は基本的に山田小枝 (1988) の該当部分を引用した。

“One way in which the perfect differs from the other aspects that we have examined is that it expresses a relation between two time-points, on the one hand the time of the state resulting from a prior situation, and on the other the time of that prior situation.”

(いままでわれわれがしらべてきた、そのほかのアスペクトからパーフェクトがことになっていることのひとつとして、パーフェクトはふたつの時点のあいだの関係を表現している。つまり、一方には先行する場面から結果として生じてくる状態の時間があり、他方には先行する場面そのものの時間がある、パーフェクトはこれらのふたつの時点のあいだの関係を表現しているのである。)

“The perfect is rather different from these aspects, since it tells us nothing directly about the situation in itself, but rather relates some state to a preceding situation.”

(パーフェクトはこのアスペクトとはかなりことになっている。なぜなら、パーフェクトは場面そのものについては直接的にはなんらかたらないからである。むしろ、ある状態をそれに先行する場面と関係づけているのである。)

また、本稿では Comrie (1976:56-58) のいう “perfect of result” をあらわすのに「状態パーフェクト」という術語を使用する<sup>16</sup>。

“In the perfect of result, a present state is referred to as being the result of some past situation: this is one of the clearest manifestations of the present relevance of a past situation.”

(状態パーフェクトでは、現在の状態は、過去の、ある場面の結果であるとして、さしだされている。これは、過去の場面が現在にかかわりをもっているということの、もっとも明確なあらわれ方のひとつである。)

## 3 の実現する意味

以下で、がどのような意味を実現し得るのかについて、実際に用例を検討した結果を見ていくことにする。

### 3.1 現在と切り離された過去の事柄

これらの用例では、があらわしている動作が、過去のある時間に行われた現在と切り離された過去の事柄をあらわしている。3.1 の用例は あるいは との置き換えが不可能である。3.2 の例が あるいは との置き換えが可能であるのと対照的な結果となっている<sup>17</sup>。

(1) 「 \_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_ ?」 [ \_\_\_\_\_ :40]

(誰ですか、昨日一緒に来た女性の方のことですか?)

(2) \_\_\_\_\_

---

を参照。

<sup>16</sup> 「結果のパーフェクト」なども訳し得るが、4章で浜之上幸(1991, 1992)をもとに考察を行うため、浜之上幸(1992)にあわせて、本稿でもこの術語を使用することにする。

<sup>17</sup> この結果は4章で述べる動詞の持つアスペクト的クラスと関連がある。詳しくは4章を参照。



- (10) \_\_\_\_\_ . [ :52]  
 (おばあさんは私と別れる時、頭にかぶった黄色い手ぬぐいをなでつけた.)
- (11) \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_ ? [ :167]  
 (若干湿気を含んだたばこが、過度に乾燥したたばこよりもうまいという事実、ご存知ですか?)
- (12) \_\_\_\_\_ . [ :199]  
 (頭に白い手ぬぐいをして、空色の制服を着た娘たちが声を出さず行き来した.)

次に \_\_\_\_\_ と置き換えが可能な例である.

- (13) \_\_\_\_\_ . [ :63]  
 (しばらく話を断ち、女は涙がいっぱい溜まった目で笑う.)
- (14) \_\_\_\_\_ . [ :160]  
 (前にこぼれた髪が、膝まで広がっていました.)
- (15) \_\_\_\_\_ . [ :97]  
 (私は狂った馬にまたがった気分でした.)

3.2 に分類される動詞の特徴として - , - , - , - - といたつたヴォイス接尾辞<sup>19</sup>を持つ動詞が多いことがあげられる.ここに分類される動詞の内、約20%がこれらのヴォイス接尾辞を持つものであった.3.1に属するものでは、これらのヴォイス接尾辞を持つものが3%程度であるのに比べると、非常に高い割合であらわれている.資料による違いはあるが、これ程まで差があらわれることを考えると、これは3.2に分類される動詞の特徴であるとは言えるであろう.(16)~(18)がその例である.

- (16) \_\_\_\_\_ . [ :44]  
 (ふと壁にかかったカレンダーを見ると、明日が15日だった.)
- (17) \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_ . [ :45]  
 (乾電池がすっかり切れた壁時計が針を止めても乾電池を替えず、自動応答機が故障しておかしくなってもそのままにしておき、温水筒の中でういんういんと音が出て直すかわりにつけず、4番目の弦が切れたギターもそのまま本の間に何ヶ月も立てておいた.)
- (18) \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ . [ :115]  
 (白いペイントでメニューが書かれたガラス窓の間に赤い椅子と若い人たちのはやい身振りが映る食堂に入っ  
 ていった.)

また、ここに分類された動詞中約15%が、\_\_\_\_\_ の形式を持つものであった.3.1の動詞では、\_\_\_\_\_ を持つものは1%以下であった.これもここに分類される動詞の1つの特徴であると言っていいだろう.(19)~(21)がその例である.

<sup>19</sup> 本稿では菅野裕臣(1986-7)に倣い、- , - , - , - の他に - , - , - , - | , - , - , - , - をヴォイス接尾辞として認定する.

(19) \_\_\_\_\_ . [ :51]

(私はぼうっとした頭でおばあさんを眺めた.)

(20)

\_\_\_\_\_, \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ . [ :115]

(山のようなポテトチップと油がじりじりとする鶏の足のでんぱらにボクシング選手のグラブくらいのスパゲティ, きゅうりやトマトが盛られたサラダが出てきて大型のコップにコーラが注がれて出てきた.)

(21) 「 \_\_\_\_\_ ? \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ \_\_\_\_\_ .」

[ :99]

(頭を短くカットしていたでしょ? 猫が3匹描かれた黒いエプロンをまいて.)

(10) ~ (21)の例では動詞の動作自体は終了しているため, テンス的には3.1の例と同様に過去をあらわしていると言えるであろう. ただし, 動作が終了した結果生じる後続状態の時間がある点で3.1の例とは異なるものであり, その点からは状態パーフェクトを同時にあらわしていると言える<sup>20</sup>.

### 3.3 現在の状態

3.1と3.2で述べたものと異なり, \_\_\_\_\_ が現在の状態のみをあらわしているものもある. これらの用例は, \_\_\_\_\_, \_\_\_\_\_ との置き換えが可能なものと不可能なものがある. (22)と(23)は置き換えが不可能である.

(22) \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ . [ :81]

(槍の刃のような耳が, 威嚇するかのよう障子に見え隠れした.)

(23) \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_

. [ :128]

(私たちが座っているカフェの前のマロニエの木の下には, ぴかぴかする皮のジャンパーとスタジアムジャンパーを着た 13,4歳の子供たちが独楽のように回って踊っていた.)

これらの例は, 菅野裕臣(1986)で言われている「現在の状態」にあたるものであると思われる<sup>21</sup>.

また, \_\_\_\_\_, \_\_\_\_\_ に言い換えることができるものには以下のような例がある. これらも現在の状態のみをあらわしているといえるだろう. (24), (25)が \_\_\_\_\_ に, (26)が \_\_\_\_\_ に置き換え可能である<sup>22</sup>.

(24) \_\_\_\_\_ \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ . [ :75]

(にんじん畑の間に出た道をしばらく出て行くと, 大通りとぶつかった.)

(25) \_\_\_\_\_ \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_

. [ :107]

(彼は若干腫れたように鮮明に二重になった自分の美しい目を隠してもするように, 縁がなく丸く黒いレンズだけがあるサングラスをかけた.)

(26) \_\_\_\_\_ \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_

<sup>20</sup> はっきりとしたパーフェクトの形式を持たない言語では, パーフェクトをあらわすために過去テンスを使用することがあるようである. Comrie(1976:57)参照.

<sup>21</sup> 菅野裕臣(1986)では以下の例のみが挙げられている.

\_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ .  
もともときれいな女がおおい. (菅野裕臣(1986)より)

<sup>22</sup> 本稿の段階では, \_\_\_\_\_ が現在の状態をあらわす場合, どのような条件の下で \_\_\_\_\_ が \_\_\_\_\_ 又は \_\_\_\_\_ に置き換え可能であるのかは明らかにすることができなかった.

. [ :134]

(童話のように顔の形を持った木々や花に変わり、後にはとても華麗なローマ時代の寝室になった。)

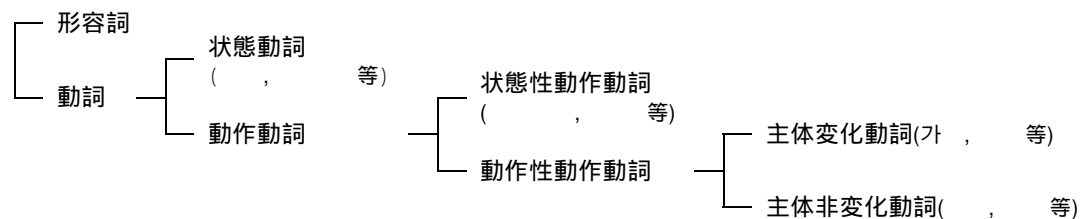
これらの例では、をとる動詞の動作自体を考えることが難しい。その結果 3.2 で挙げた例のように、動作があり、その動作の結果生じた状態があるというような 2 つの時間の間の対立を失ってしまうことになる。その結果、動作終了後の結果である状態のみに注目が置かれ、が現在の状態のみをあらわしていると考えられる。

#### 4 「」のあらわすテンス・アスペクト的意味と動詞の持つアスペクト的クラスとの関連性

3 章で があらわしうる 3 つの意味について見てきたが、南基心・高永根 (1987) で「結果性があると完了的用法を示しめる」という指摘があるように、上で挙げたそれぞれの意味をあらわす時に、それぞれの意味と、それらの意味をもたらす動詞の持つアスペクト的クラスとの間にはある一定の制限が存在する。以下でその制限と動詞のアスペクト的クラスとの関連性について見ていく。

動詞のアスペクト的クラスの分類については浜之上幸(1991)を用いることにする。その枠組みを簡単にまとめると以下のようである。

##### 【動詞のクラス分類の枠組み】



状態動詞は を持たないもの。状態性動作動詞は が具体的な動作をあらわさず、局面を特定できないものをいう。動作性動作動詞とは が具体的な動作をあらわし、局面を特定しうるものをいう。動作性動作動詞は、さらに主体変化動詞と主体非変化動詞に分類される。主体変化動詞とは、動作の終了後の局面において主体に何らかの予測可能な変化がもたらされるものを言う。その主体の変化とは、空間的位置の変化、量的な変化、物理的性質の変化、姿勢の変化などをいう。主体非変化動詞は反対に、動作の終了後の局面において主体は変化せず、動作の生起以前の状態に戻ることができるものをいう。

#### 4.1 動作動詞

##### 4.1.1 動作性動作動詞

浜之上幸(1992:59)では、動作性動作動詞について自動詞・他動詞と、主体や客体の変化・非変化とを組み合わせ、考えられる 6 つの組み合わせの各々の場合について、 の両形式が状態パーフェクトをあらわしうるかどうかについて示している。これは が状態パーフェクトをあらわす場合にも適応される。浜之上幸(1992:59)で示されている表を、 について書き換えると以下のようになる。

【表 1】動作動詞において が状態パーフェクトをあらわすための条件

動詞	主体	客体	状態パーフェクトの形式	動詞の例
自動詞	非変化	なし	なし	(泣く)
	変化	なし	主体 + < >	(散らばる)

他動詞	非変化	非変化	なし	(言う)
	非変化	変化	主体 + < >	(巻く)
	変化	非変化	なし	なし
	変化	変化	主体 + < >	(持つ)

上の表のように、自動詞で主体が非変化のものと、他動詞で主体非変化・客体非変化のもの、また他動詞で主体変化・客体非変化のものは の形でも状態パーフェクトをあらわすことができない。言い換えれば、自動詞では主体が変化しないもの、他動詞では客体が変化しないものは状態パーフェクトをあらわすことはできないのである。その場合は現在と切り離された過去の事柄をあらわす。また、状態パーフェクトをあらわすことのできる動詞が の形をとった場合、必ず状態パーフェクトをあらわすのではなく、現在と切り離された過去の事柄もあらわし得る。つまり、動作性動作動詞においては現在と切り離された過去の事柄をあらわすための制限は存在しないのである。

以下にそれぞれの動詞の場合の例を挙げておく。状態パーフェクトをあらわしうる動詞については、状態パーフェクトの例、そうでないものは現在と切り離された過去の事柄をあらわしている例である。

## 【自動詞: 主体非変化】

- (27) 가 가 \_\_\_\_\_ . [ :136]  
 (彼が軽く頭を上げ、目を開いた。もうおおきな大人の顔にも泣いた跡が残るんだな。)

## 【自動詞: 主体変化】

- (28) 가 CD 가 가 \_\_\_\_\_ 가  
 . [ :113]  
 (彼の部屋に時々テープや CD を借りに行きもし、五線紙が雑然と散らばった部屋に、彼がいない間一人ではんやりと立っ立っもした。)

## 【他動詞: 主体非変化: 客体非変化】

- (29) 가 \_\_\_\_\_ . [ :49]  
 (わたしが言った話は、事実でありもし、事実でなくもあった。)

## 【他動詞: 主体非変化: 客体変化】

- (30) 가 \_\_\_\_\_ 가  
 [ :118]  
 (横に座っていた男がマリファナを巻いたものを渡した。私ははじめてだったが、平然と 2 口吸って私の前の女、頭をずっと左右に揺らしている胸の大きな女に渡した。)

## 【他動詞: 主体変化: 客体変化】

- (31) \_\_\_\_\_ 가 , 가  
 . [ :187]  
 (その女性だと確信するや、いつのまにか受話器を持った手に力が入り、胸のある所が重苦しく押さえつけられてきました。)

また、浜之上幸(1992)では \_\_\_\_\_ が状態パーフェクトを形成する時、他動詞の場合に限りヴォ



(35) \_\_\_\_\_ 가

. [ :83]

(木の根元から鱗のような赤い葉が小枝の先までくつき、めらめらと火をつけておいてあった.)

(36) \_\_\_\_\_ . [作例]

(私の友達の中には結婚している人は少ないです.)

状態動詞において が現在の状態をあらわしうるのは、状態動詞が \_\_\_\_\_ を持たず、 \_\_\_\_\_ であらわせるような動作の生起～終了の局面を持たないため、 \_\_\_\_\_ が過去の事柄をあらわした時のように、 \_\_\_\_\_ をとる動詞の生起～終了の局面を過去に行われたと認識すること自体ができなくなるためであると考えられる。同時に、 \_\_\_\_\_ であらわせるような動作の生起～終了の局面を持たないことから、状態パーフェクトをあらわすこともできないので、現在の状態のみをあらわすのである。

\_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_ などは以下の例のように用いられると、現在と切り離された過去の事柄をあらわすことがある。しかし、この場合の \_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_ などは状態動詞ではないことに注意しなくてはならない。また、この場合は(35)(36)の場合と異なり、これらの動詞を \_\_\_\_\_ の形に置き換えることが可能である。

(37) \_\_\_\_\_ / \_\_\_\_\_ . [作例]

(先月起こった事件の犯人が捕まった.)

(38) \_\_\_\_\_ / \_\_\_\_\_ . [作例]

(彼に騙されて結婚した彼女は泣いて後悔した.)

ただし、 \_\_\_\_\_ の場合には \_\_\_\_\_ との置き換えは可能であるが、(37)(38)の場合とは異なる。 \_\_\_\_\_ は現在の状態しかあらわすことができず、 \_\_\_\_\_ に置き換えると祖父が現在は田舎にいないということを意味する。

(39) \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ / \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ 5 \_\_\_\_\_ . [作例]

(祖父がいらっしゃる / いらっしゃった田舎に行こうと思うと車で5時間もかかる.)

\_\_\_\_\_ , \_\_\_\_\_ などの動詞が現在と切り離された過去の事柄をあらわすためには、 \_\_\_\_\_ の形をとらなくてはならない。 \_\_\_\_\_ の形をとると現在はそうではないというニュアンスが付加される。

(40) \_\_\_\_\_ .

[作例]

(キャベツの 人形 みたいだったその子の丸い顔が今は四角い顔に変わってしまった.)

(41) \_\_\_\_\_ 가 \_\_\_\_\_ 가

. [作例]

(一度は派手な生活を楽しみ、最高の美貌の女優と結婚していた彼が、今は海辺のある場所で漁夫の生活をしながら一人静かに過ごしている.)

ここでも注意すべきことは、全ての状態動詞が \_\_\_\_\_ の形で現在の状態をあらわす訳ではないということである。状態動詞の中には現在の状態をあらわすことができず、現在と切り離された過去の事柄のみをあらわすものも存在する。

(42) \_\_\_\_\_ . [ :163]

(女の人は反射的に、たばこを押しつけて消したんですよ。間違いをして見つけた子供みたいになってことで  
す。)

状態動詞が の形をとった時に、どのような条件下で現在の状態をあらわしうるのかは現段階でははっきりとした結論を出すには至っていない。特に(34)から(36)の状態動詞は の形で現在の状態しかあらわせないと思われる。今後さらに細かい動詞の分類が必要とされる。

## 5 おわりに

### 5.1 まとめ

ここまで があらわす意味、そして動詞の持つアスペクト的クラスによって、その動詞があらわすことができる意味に制限があることを見えた。細かいところを省いて、簡単にまとめると以下の表のようになる。

【表2】 があらわす意味と動詞のアスペクト的クラス

自他動	状態動詞	状態性動作動詞	動作性動作動詞					
			自動詞		他動詞			
			変化	非変化	変化		非変化	
主体			なし	なし	非変化	変化	非変化	変化
客体								
現在と切り離された過去の事柄(3.1)								
現在の状態に影響をあたえている過去の事柄(3.2)	×	×		×	×		×	
現在の状態(3.3)			×	×	×	×	×	×

が「 」その意味しかあらわさない。「 」その意味をあらわし得る。「×」その意味をあらわすことができない。

状態動詞、状態性動作動詞においてはさらに細かく分類することもできると思われるが、現在の段階ではその基準がまだわからない状態にある。このように表にまとめて見てみると、 が共通してあらわし得るのが「現在と切り離された過去の事柄」であることがわかる。ただし、状態動詞の中には の形で現在の意味しかあらわすことのできないものがいくつか存在する<sup>23</sup>。また、「現在の状態に影響をあたえている過去の事柄(状態パーフェクト)」については、自動詞では主体が変化するもの、他動詞では客体が変化するもののみが、その意味をあらわすことができた。

### 5.2 結論

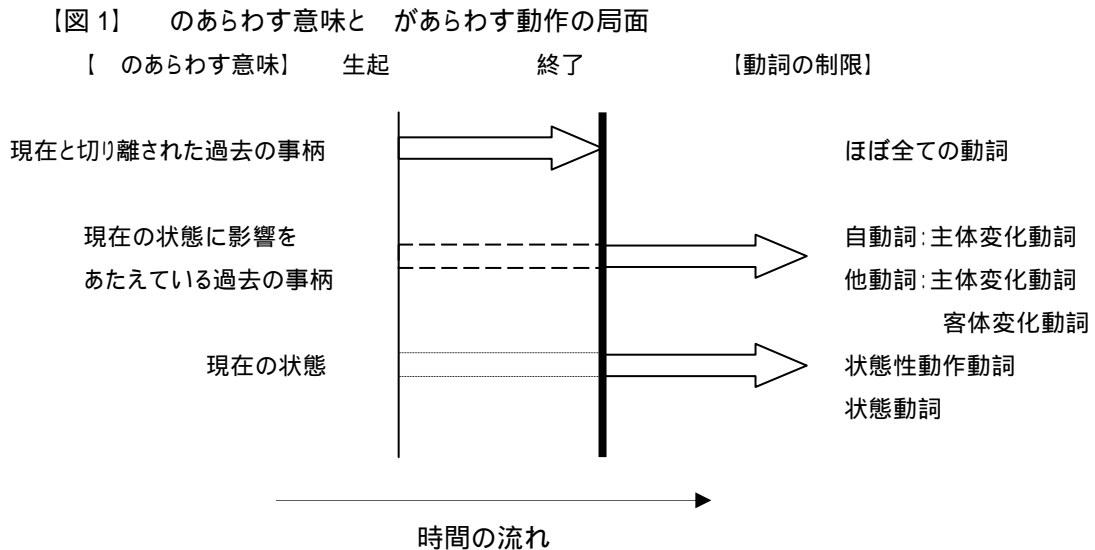
以上の結果から、 のあらわす意味が一体何であるのかについて考えてみたい。3.1 で述べたものは が過去テンスをあらわしているものであり、3.2 で述べたものは がテンス的には過去をあらわしているが、同時に状態パーフェクトをあらわしていた。3.3 で述べたものは は現在テンスをあらわしていた。これらをまとめると以下のようになる。

【表3】 のあらわすテンス・アスペクト的意味について

のあらわし得る意味	テンス的意味	アスペクト的意味
現在と切り離された過去の事柄(3.1)	過去	
現在の状態に影響をあたえている過去の事柄(3.2)	過去	状態パーフェクト
現在の状態(3.3)	現在	

<sup>23</sup> , , など4.2で挙げたものの他に などが考えられる。

全ての場合を総合して考えると があらかし得る意味はテンス的には「過去」と「現在」,そしてアスペクト的には「状態パーフェクト」ということになる。これらの意味を動作の生起～終了の局面と関連付けて図にすると以下のようなになる。



「現在と切り離された過去の事柄」は動作終了後にその結果が残らないため、生起～終了の局面のみをあらわしており、それが過去の事柄であることをあらわしていると言える。「現在の状態に影響をあたえている過去の事柄」では、動作終了後の局面に注目が置かれているが、生起～終了の局面が過去に起こったことであることも同時にあらわしているため点線で示してある。「現在の状態」は生起～終了の局面が存在しないとは言い切れないが、生起～終了の局面の存在自体を考えることが難しいもので、ほぼ動作終了後の状態のみをあらわしていると言えるものである。

このように考えると が全ての意味に共通してあらわしている部分は生起～終了の局面であると言える。 は をとる動詞の動作が終了の局面を乗り越え、そしてそれが過去の事柄であるということを示している。 のあらかしそれぞれの意味を動詞のアスペクト的クラスと関連付けて考えると、現在と切り離された過去の事柄をあらわす場合にのみ、 をとる動詞に制限がないことが確認された。状態パーフェクトをあらわすか現在の状態をあらわすかは動詞の持つアスペクト的クラスなどによって決定されるものであり<sup>24</sup>、それは があらかし意味の外にあるものであると考えられるため、 が「状態パーフェクト」や「現在の状態」をあらわす固有の形式であるとは言い難い。

これらの結果から本稿では は「過去をあらわすテンス形式」であると結論付ける。

### 5.3 今後の課題

本稿では のあらかしうる意味について、またそれと動詞のアスペクト的クラスとの関連性について述べた。本稿では のみに焦点を当てて考察を行ってきたが、今後他の連体形も合わせて現代朝鮮語の連体形の体系の中で考えていくことが必要である。また、状態動詞、状態性動作動詞のよりいっそう細かい考察と、 が「状態パーフェクト」と「現在の状態」をあらわすための条件についてさらに細かい考察が必要である。特に状態性動作動詞については深い考察ができなかった。これらを今後の課題としたい。

<sup>24</sup> 本稿では動詞の持つアスペクト的クラスを提示するに終わったが、その他には の被修飾語や、 と共起する副詞などとの関連が考えられる。どのような条件のもとで が「状態パーフェクト」や「現在の状態」をあらわし得るのかについてはさらに詳細な考察が必要とされる。

〔謝辞〕本稿をまとめるにあたり、菅野裕臣先生には多くのご教示をいただきました。また、指導教官である野間秀樹先生をはじめとして、伊藤英人先生、高東昊先生にも非常に多くのご指導をいただきました。用例の検討や作例にあたっては東京外国語大学大学院生の金珍娥氏をはじめとする母語話者の方々にお世話になりました。その他、東京外国語大学朝鮮語学ゼミの方々、朝鮮語研究会の会員の方々からは、貴重な助言を多くいただきました。以上の方々にこの場を借りて深く感謝申し上げます。

## 参考文献

### (1) 朝鮮語で書かれたもの

- 高永根(1990) 「時制」 『國語研究』 167 - 主題別 國語學 研究史 - 』 東亞出版社
- (1980) 「時制」 『國語研究』 167
- (1991) 「時制」 『國語研究』 167
- (1987) 「時制」 『國語研究』 167
- (1980) 「時制」 『國語研究』 167
- 』 太學社
- 金倉燮(1987) 「時制」 『國語研究』 167
- 南基心(1978;1985) 『國語文法 時制問題 關 研究』 塔出版社
- 南基心・高永根(1987) 『國語研究』 167 』 塔出版社
- 野間秀樹(1994a) 『連體形 < > < > >』 PACKS 2
- (1992) 『國語研究』 167
- 徐正洙(1988) 「時制」 『國語研究』 167
- 』 集文堂
- 徐正洙(1990) 『國語研究』 167 』 韓國文化社
- 徐正洙(1994) 『國語研究』 167
- 時事英語社 編輯局 (1979) 'THE NEW WORLD COMPREHENSIVE KOREAN ENGLISH DICTIONARY' 時事英語社
- (1978) 『國語研究』 167
- 李南淳(1981) 「現代國語 時制 相 研究」 『國語研究』 46
- 李翊燮(1991) 「相對 時制」 『國語學講座 1 文法』 太學社
- 李翊燮・任洪彬(1983) 『國語文法論』 學研社
- 李周行(1992) 『現代國語文法論』 大學教科書株式会社
- 任洪彬(1982) 「先語末{- -} 斷絶 様相」 『冠嶽語文研究』 第 7 輯 大學校 國語國文學科 塔出版社
- 任洪彬(1993) 「{- -}」 『國語學』 23 國語學會
- 任洪彬・張素媛(1995) 『國語文法論』 韓國放送大學校出版部
- 油谷幸利(1978) 「現代韓國語 動詞分類」 『朝鮮学報』 第 87 輯 朝鮮学会
- 崔東柱(1995) 「國語 時相体系 歴史的 變化 研究」 大學校大學院 文學博士學位論文
- (1937) 『國語研究』 167
- (1991) 『國語研究』 167

### (2) 日本語で書かれたもの

- 伊藤英人(1989) 「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」 『朝鮮学報』 第 131 輯 朝鮮学会

- 伊藤英人(1990)「現代朝鮮語動詞の過去テンス形式の用法について(1) 形について」『朝鮮学報』第137輯 朝鮮学会
- ヴァインリヒ, H(1982)『時制論 文学テキストの分析』紀伊國屋書店  
(Weinrich, H.) *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*. W. Kohlhammer の日本語訳
- 梅田博之(1985)『NHK ハングル入門』日本放送協会出版
- 梅田博之(1985)「基本文法概説」『NHK ハングル入門』pp.264-281 日本放送協会出版
- 梅田博之・村崎恭子(1982)「朝鮮語のテンス・アスペクト」『講座日本語学』11 明治書院
- 大阪外国語大学朝鮮語研究室編(1986)『朝鮮語大辞典』角川書店
- 紙谷栄治(1978)「連体形用法におけるテンスに関する意味について」京都府立大学学術報告『人文』30
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂
- 菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』白水社
- 菅野裕臣(1986)「朝鮮語のテンスとアスペクト」学習院大学言語共同研究所紀要第9号
- 菅野裕臣(1986-7)「中級講座」『基礎ハングル』1-12号. 三修社
- 菅野裕臣(1998)「形と意味の関係についてのいろいろな問題 連体形 -ㄴ을めぐって」朝鮮語研究会第149・150回記念大会 発表要旨
- 菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人共編, 金周源・徐尚揆・浜之上幸協力(1988)『コスモス朝和辞典』白水社
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト - 現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 河野六郎・梁昊淵(1979)『韓国語講座』高麗書林
- 河野六郎・梁昊淵(1981)『韓国語講座』高麗書林
- 国立国語研究所(1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 権在淑(1992)「現代朝鮮語の用言の接続形- について」『Lingua』第3号 上智大学一般外国語小学館・金星出版社共同編集(油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎編)(1993)『朝鮮語辞典』小学館
- 鈴木重幸(1972;1994)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎(1974)「連体形のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」『教育国語』39 むぎ書房
- 塚本勲(1983)『朝鮮語入門』岩波書店
- 中島仁(1998)「現代朝鮮語の連体形語尾「-ㄴ」について 動詞につく場合」朝鮮語研究会第148回発表要旨
- 中西恭子(2001)「現代朝鮮語の連体形語尾- について -ㄴとの使い分けという観点から」東京外国語大学大学院 修士学位論文
- 野間秀樹(1988)「< >の研究 現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって」『朝鮮学報』第129輯 朝鮮学会
- 野間秀樹(1990)「現代朝鮮語の名詞分類 - 語彙論・文法論のために」『朝鮮学報』第135輯 朝鮮学会
- 野間秀樹(1993)「現代朝鮮語の対格と動詞の統辞論」『言語研究』東京外国語大学語学研究所
- 野間秀樹(1994b)「現代朝鮮語の語彙分類の方法」『言語研究』東京外国語大学
- 野間秀樹(1997)「朝鮮語と日本語の連体修飾節(冠形節)構造」『朝鮮文化研究』東京大学文学部朝鮮文化研究室紀要第四号
- 浜之上幸(1991)「現代朝鮮語のアスペクト的クラス」『朝鮮学報』第138輯 朝鮮学会
- 浜之上幸(1992)「現代朝鮮語の「結果相」= 状態パーフェクト 動作パーフェクトとの対比を中心に」『朝鮮学報』第142輯 朝鮮学会
- 浜之上幸(1997)「朝鮮語のアスペクト 日本語との対比の観点から」平成8年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告(1)
- 前野敬美(1997)「現代朝鮮語の-ㄴ連体形について」東京外国語大学卒業論文

- 村田寛(1997) 「< >の研究 - 現代朝鮮語の時間の表現 - 」 『朝鮮学報』第165輯 朝鮮学会  
 村田寛(2000) 「現代朝鮮語の< -ㄹ >について」 『朝鮮学報』第175輯 朝鮮学会  
 安田吉実・孫洛範 共編(1992) 「民衆 日辞典」 民衆書林  
 山田小枝(1988) 『アスペクト』 むぎ書房 [Comrie(1976)の日本語訳]  
 油谷幸利(1988) 『ハングルの基礎』 大修館書店

**(3)その他の言語で書かれたもの**

- Comrie,B.(1976) *Aspect*. London:Cambridge University Press  
 Comrie,B.(1985) *Tense*. London:Cambridge University Press  
 Comrie,B.(1994) 'Tense', *The Encyclopedia of Language and Linguistics. Volume 9*. Oxford:Pergamon Press Ltd. pp.4558-4563.  
 Klein,W(1994) *Time in Language*. London:Routledge  
 (1994) 『 2 』  
 李元植(1982) 『韓語入門』 中國文化學院華岡出版部  
 Lukoff,F(1982) *An Introductory Course in Korean*. Seoul:Yonsei University Press  
 Ramstedt,G.J(1939) *A Korean Grammar*. (= "MSFOu" 82), Helsinki:Suomalais-Ugrilaisen Seura  
 Martin,S.E.(1992) *A Reference Grammar of Korean*. Tokyo:Charles E.Tuttle company

**用例を収集した資料 [ ]の中は略号**

- 『 96 』 1996年  
 「 (天地間) 」 [ ]  
 「 」 [ ]  
 「 」 [ ]  
 「 」 [ ]  
 「 」 [ ]  
 「 」 [ ]  
 『 95 』 現代文學 1995年  
 「 」 [ ]  
 「 」 [ ]